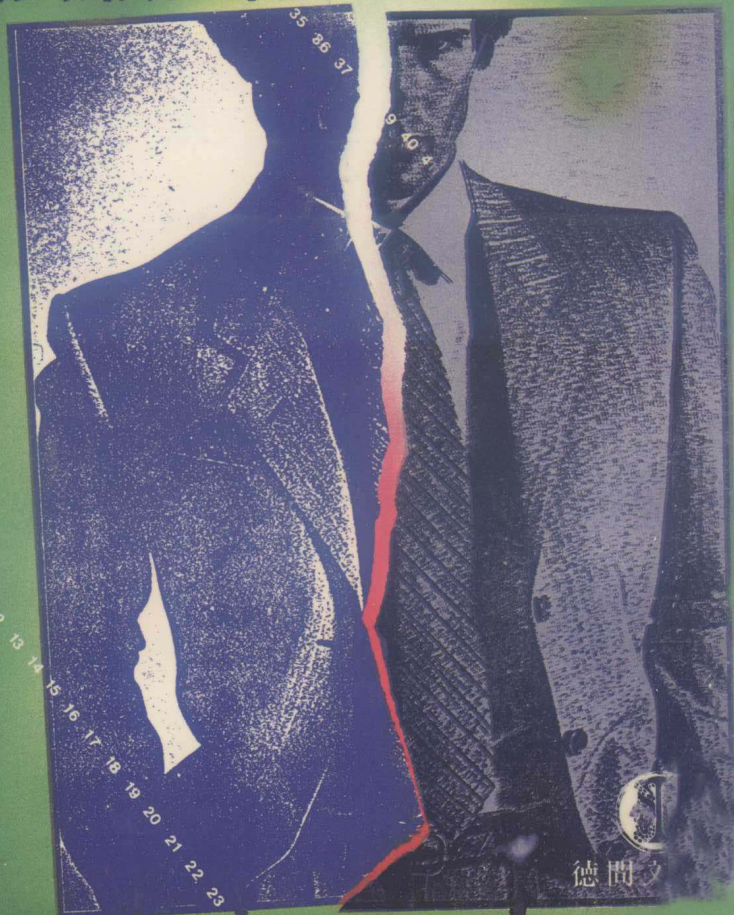


# 銀行破産

広瀬仁紀



徳間文

徳間文庫



ぎんこうはさん  
銀行破産

© 1982 Niki Hirose Printed in Japan

416-2

1982年6月15日 初刷

著者 広瀬 仁紀

発行者 徳間 康快

東京都港区新橋四一〇七一〇五  
発行所 株式会社 徳間書店

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)  
振替 東京四一四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社  
製本

〈編集担当 吉川和利〉

ISBN4-19-597321-X (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

良行破産

広瀬仁紀



徳間書店



目次

消えた死体 5

東和銀行 29

フランク・ウイン 54

暗闘商社 78

銀行対商社 102

準主力銀行 127

献金リスト 153

過剰融資 175

見えない空中戦 199

陰謀商社 224

銀行破産 248

エピソード 275

解説 清水一行 279



## 消えた死体

## 1

神奈川県警鎌倉署の刑事、安立<sup>あだち</sup>省吾<sup>しょうご</sup>が、早朝の材木座海岸の波うちぎわに倒れている人影を発見したのは、まったくの偶然だったといっている。

その日、安立は独身者の気安さから、何となく朝の海岸を散歩したい気分におそわれ、まだ五時半をすぎたばかりだというのに寢床を抜けだしたのだ。ぶらぶらと道を歩いて、鎌倉の古刹<sup>こさつ</sup>光明寺の山門正面あたりから右に曲がり、細い道をとおって浜辺まで出た。

この年の夏が異常なほど涼しすぎたために、いつもならまだ砂浜をうずめているはずの海の家は、あらかた店じまいをしていたので、安立が久しぶりに出てきた八月末の海岸はがらんとした感じにつつまれていた。

安立は胸いっぱい潮風を吸いこんで深呼吸をしながら思いきり背をそらせた。そのとき、眼の端で葉山町から海岸ぞいに稲村ヶ崎にぬける有料道路に外国人が一人立っているのを捉えた。

その足もとにゴルフ・バッグがおかれている。鎌倉でなら珍しい光景ではない。稲村ヶ崎から走りつづけて茅ヶ崎の先の、カントリー・クラブにでも行く仲間の車を待っているのだろう。安立は

格別気にもとめず、姿勢をもとにして背筋をのばした。

まだ六時前だというのに、波うちぎわから百メートルほど先の海面に、一応はキャビンのついたヨットが波間に浮かんでいる。

ヨットといっても帆走するものでなく、エンジンで航走するやつだから、安立にいわせればモーターボートということになるのだけれども、材木座の海に隣接する逗子小坪、葉山海岸のマリーナに船体を繋留<sup>けいりゅう</sup>している連中が、一様に「ヨット」といっているのは安立にしても知っていた。

(なんでモーターボートといっちゃいかんのかな)

ひどくのんびりとした愚にもつかないことを、安立はぼんやりと考えたが、視線だけはこらし、キャビンの上と下甲板にすわりこんで、こちらに背を向けている二人の男たちが釣りをしているらしいのを見さだめることができた。

潮が満ちてくれば、波のきわで釣りをする人がいるくらいなのだから、あのあたりでならまずは楽しむことができるのだろう。

そう思い、一度眼をあげて早朝の空をながめてから、安立がゆっくりと視線をおろしたとき、斜め右に開いている小流のながれ口に妙なものが見えた。それは、いままで気がつかなかったのが不思議なくらいに、はっきりとした形をとっていた――。

(人が倒れている!?)

背後の山肌を越えて、やっと砂浜にも射しかかってきた陽光の下で、一瞬とまどうように安立は思った。

背広を着たまま、前にかがみこもうとして崩れおちたような不自然な恰好で倒れているその人影に、何か重大な異変が起きたことは間違いなかった。

それは夏の早朝の平和な海辺の景色とはなじまない、たしかに不自然な光景であった。だいたい夏の海岸に背広姿というのがそぐわないし、夜中に酔っぱらいが道に迷って、そのまま寝こむにふさわしい場所であるわけがない。

(急病――)

心臓麻痺、あるいは脳溢血……といった言葉が、安立の脳裡を横切った。

安立は三十メートルほどの距離を一気に走って、倒れている男を背後から抱き起した。

「もしもし……」

どうしました？　と言いかけた言葉を、思わず喉に詰まらせる。

――死んでいる！

背筋に、冷水を浴びたような慄えが奔った。

抱き起したときの、まったく抵抗感のない、ぐにやりとした感覚、そして、思わず覗きこんだ横顔の不気味な青白さ……、だけでなく、安立の勘が男の死を感じとっていた。

それでも念のために脈搏を確かめようと、だらりと垂れた男の手を持ち上げたとき、なにか紙片のようなものが砂浜に落ちた。安立は半ば無意識に、その白い紙片を拾い上げ、ポケットにしまってから、急いで男の手首を探った。

やはり脈搏はない。

(変死……)

動転した意識で、ぎっと男の全身を見回したが、外傷らしきものはどこにも見られなかった。かすかに震える手で男を元の状態に、そっと砂浜に戻す。現場保存――という言葉が頭に浮いたからだった。

安立は、まだ若い。それは二十七歳という年齢のことだけではなく、刑事としての経験も浅かった。神奈川県下の私立大学を卒業してから、ほんらい殺人事件の捜査官になりたくて警察官の職業を選んだ安立だったが、適性が兇悪犯罪には向いていなかったのか、殺人事件などを扱う所轄の刑事課に配属になったのは、横須賀にいた一年間だけで、現在の鎌倉署に転じてからは、児童の事件や家出人……など、市民の相談役的な仕事が多い防犯課に一貫して所属させられている。それでも横須賀時代に、殺人事件の現場を踏んだ経験はあったから、動転していたとはいえ、現場保存という考えが咄嗟にひらめいたのだ。

(とにかく本署に連絡しなければ)

決断して立ち上ったとき、自動車のクラクションの音が三度した。

それにつられたように、上方の有料道路のきわを見あげた安立の視界の中で、さっきまでそこに立っていた外国人が、ゴルフ・バッグをかかえるようにして、停められた自動車に乗りこむのが見えた。

(あつちのはのんびりとゴルフ行きなのに、こっちは朝飯前から仕事とは)

舌うちでもしたいような気分になりながら、それでも安立は砂浜を駆けだした。光明寺の山門の見える口まで出て、バスの通っている道を右に走ると、すぐに交番がある。

連絡はすぐにとれた――。どうやら変死体の発見に受話器の向うが色めき立っているのが安立にもわかった。最近、街中ががさつになつてきたといつても、それでも事故ででもなければ鎌倉市内で変死体が発見されることなど、数年に一度あるかないかなのだ。色めきたつて当然だった。

そこから本署に連絡したあと、宿直の警官と現場にもどった。とにもかくにも、現場保存にあたらなければならぬ。

安立同様、一種の昂<sup>たか</sup>ぶりを感じているらしい若い警官は、あたりを見まわしながら、

「安立さん、死体なんてどこにあるんですか？」

怪訝<sup>けげん</sup>な表情で訊ねた。

「どこに……!?」

安立は愕然とした。そこが現場であるのは間違いようがない。それなのに、さっきまで横たわっていたはずの死体が消えてしまっているのだ。

「こ、こんな馬鹿な……」

うめくように安立はいつて絶句した。死体を発見してから十分ほどしか経過していないのだ。好きで読んでいる推理小説のなかでなら、死体消失は珍しいトリックではないにしても、それが現実突発したとなると、安立にも説明のしようがなかった。

最前、見たときよりは、干潮につれてモーターボートが海岸からの距離を遠くしている。それに乗っている男たちは制服の警官と安立が何かしきりにいいあっているのに興味をもったらしく、一人がキャビンの中に入って船首を岸のほうに向け、五十メートルほどの近さまで進めてきて、そこで停止した。どうやら、それから先は干潮で底が浅くなりすぎ、前に進むことができないという状況のようだった。

安立は茫然とした思いで、そのモーターボートの様子をながめていた。ボートの男たちは海岸の光景に興味があるとしても、諦めざるを得ないと思ったのか、渋々という具合に船首をまた沖に向けてなおすと、ゆっくりとした速度で海面を航走しはじめた。

そのころになって、死体が消滅してしまった現場に近づいてくるパトロールカーの警笛の音が聞こえてきた。

わずか十分たらず眼をはなしたあいだに、誰もいない海岸に倒れていた死体が消えてなくなりました——などという間の抜けた話が警察署内で通用するわけがない。

午前中は課長にさんざん油をしばられ、それがやつとすんだかと思えば、今度は署内の誰かれに冷やかされて、安立はくさりきつていた。

署内では、もっぱらそれは安立の錯覚ということになってしまっている。安立が見たという海辺に倒れていた男が、散歩をしていたと決めこむから背広姿ではおかしいということになるのであり、実際は何か急用があつて海岸を近道にして材木座の街路に出ようとしていたのかもしれないではないか。午前六時前なら国鉄横須賀線逗子駅と鎌倉駅のあいだを運行しているバスの始発時間だから、それは容易に考えられるし、その途中で、強度の脳貧血あるいは何か神経性の発作にでもおそわれて、一時的に失神して倒れたということも考えられる。

安立が仰天して駆けさつたあと、意識が回復し、仰天した男がいたことなど露知らずに家にもどつてしまったのか、それとも、そのまま街路に出て行つてしまったのかもしれない。

「どちらにしても、君に死んでいると誤解されたほどのだから、まず家にもどつて医者でも呼んだらう。泡ばかりくつとらんで、そういうときは鼻孔に指をあてがって呼吸の有無を確かめるくらいはするものだぞ」

巡査からたたきあげて刑事課長にまでなつただけに、課長は苦虫をかみつぶしたような表情になつて手きびしく注意した。

（自分では馴れたつもりでいたが、刑事ってやつはやっぱり年期だな……）

いくぶんげつそりとして安立はそう思った。進退伺いとまではいなくても、とにかく自分の早とちりで、所轄のパトロールカーを緊急出勤させてしまった以上、始末書を出さなければならぬだろうと考えると、自分の机にもどっても安立はますます憂鬱になるばかりだった。

書式にしたがって当該の事項を記入すればいいのだから、始末書をかくといっても苦勞することはないのだが、なんとも下手くそな文字で書かなければならないと思うと、いっそう憂鬱になってくるのだ。

それを考えていると、安立はむしろしゃとした気分になり、煙草を吸うつもりで背広のポケットをさぐった。

つきに見はなされているときというのはそういうものなのか、掴みだした煙草の箱はひしゃげていて、中には一本も残っていなかった。安立は舌うちをしながら、なお未練げにポケットの底をさがりまわした。

そして、指先にひっかかったものを取り出したが、それが箱から落ちこぼれた煙草でないのは、初めからわかつている。感触で、名刺のようだと安立は思ったが、案にたがわずそれは細長く二つに折られた名刺だった。

（こんなものをどこで拾ったのか？）

と、一瞬とまどったが、すぐに気がついた。朝の海辺で死体を発見したとき、砂の上から無意識に拾いあげた白い紙片がこれであつたらしい。もつとも、その「死体」がのこのこと歩きだしたかどうかはわからないが、とにかく消えてしまったというのだから世話はない。

そのまま名刺を屑箱に直行させようとしたが、なんとなく気になって開いてみた。くそいまいま

しい騒動に自分を引きずりこんだ相手の正体がわかるかもしれないと思ったからだった。

三国物産機械第二部長・由利明——と二行に書かれた左隅には、型どおりに電話番号と会社所在地が刷りこまれ、名刺の肩には三国物産の、安立も知っている社章が型でおされて表面からもりあがっていた。

「こいつが当人のものなら、ちょいとした格だな」

ほんの少しだけだが、感心している声になって安立は呟いた。商社のなかでも三国物産となれば有数の名門とっていいし、そういわれるにふさわしく旧財閥系の巨大商社であった。

年商十兆円——などという途方もない数字を、新聞か何かで読んだ記憶が安立にもあったが、そういう企業部長職ともなれば、相当の地位とっていいだろう。

（この男が、今朝ぶったおれていた奴なら、その後のことを確認してやろう）

その男に会って、勝手にひょこひょこ消えやがって、などと馬鹿ばかしい文句をいったりする気はないが、倒れていた本人が無事だとわかれれば、安立のうとうとしさも、多少はおさまるに違いなかった。

机の上の受話器をとりあげ、安立は名刺に書かれているダイヤルをまわした。呼出し音が数度とは鳴りきらないうちに交換手の機械的な声が聞こえてきた。べつに捜査のさぐりをいれるわけではないのだから、安立はためらわずに先方に身分を告げて由利の在否を訊ねた。

警部補という官名に安心したらしく、交換手はすぐに回線を接続させた。

（本人が出てきたら、何と挨拶するか？）

安立がクスリと笑いかけたとき、男の声が受話器の向うから聞こえてきた。が、それは由利のものではなかった。

「私は第二部航空課長の馬場ともうしますが、由利部長は不在でございます。よろしければ私が代理でうけたまわっておりますが……」

「由利さんはお休みになっておられるのでしょうか？」

「いいえ、部長は本日から関西に出張しております」

この名刺は今朝の男のものではなかったのかと、一種の失望感を感じながら安立は思った。

関西に出張している由利が、見当はずれの材木座海岸で倒れていたりするはずがない。あの男は多分由利と交換した名刺を落しただけなのであろうか？ それにしても、安立としては引っこみがつかないような具合でもある。

「いや、それならば結構なのです。ちょっと気になることがあったので、ぶしつけにお電話をしたのですが、関西にご出張ということなら、私の思い違いでした。どうかお氣になさらずに聞きすててください」

「部長にかかわりあるようなことが、何かございましたのでしょうか？」

馬場が驚いたような口調でいったが、安立にしても、自分の失敗を見ず知らずの人間に話す気にはなれない。相手につまらぬ不安を残さないように、

「まったく私の勘違いだったのです。どうかご心配なさらないように。本当に失礼しました」

と、丁寧に詫びてから電話をきって、溜息をついた。

だが、翌日の朝、アパートの部屋のテレビを寝ぼけまなこで見えていた安立は、今度こそ飛びあがるほどに仰天した。

それが第一報であるらしく、顔写真までは画面に出てこなかったが、職業的な調子でアナウンスされているのは、三国物産の機械第二部長・由利明が、その朝はやく、京都市御池通に出るあたり

を流れる高瀬川に死体となって浮いていたことを知らせていた。

ブラウン管にうつされている高瀬川の水面の動きを、安立は茫然と眺めつづけた。

## 3

東京都千代田区大手町にある三国物産本社ビル六階の機械第二部の部屋は、八時半すぎまでにはとんどの部課員が出勤してきた。

その誰もが、部長の由利明の急死に驚いているのは間違いなかった。一階のエレベーターの扉の前で顔をあわせるなり、それが話題になっただけでなく、部屋に入って席につけば、左右の者と小声で情報を交換しあっていた。

もっとも情報といったところで、誰もテレビのニュースで知っただけだから、詳細についてわかっていくわけではない。由利の変死体が発見された時刻からして朝刊には間にあわなかったのだから。一行の記事にもなっていないのだから、誰にしても格別の見当などつけようがないといったほうがいい。

当然、情報を交換するといっても、自分たちの憶測を囁きあっているようなものだった。

始業時間の九時をすぎても、由利が部長をしていた機械第二部の各課だけは、その喧噪がつづいた。会社についてから異常を知ったらしい他所の部課員までが、わざわざ機械第二部の部屋へ様子を訊きにくるため、仕事をはじめられないというような状態だった。もっとも、現職の部長が変死したのだから、それも当然かもしれない。

航空課長である馬場正次は機械第二部の筆頭課長といってもよかったが、その机上におかれた電

話も、また、九時前からひっきりなしに呼出し音を鳴らしつづけていた。

さすがに社内電話で様子を訊ねてくるような不謹慎な者はいないが、取引先からの問合せや見舞いは、立場上もあって馬場に集中してくるのは仕方がない。電話のなかには、新聞社や総合週刊誌の編集部からの取材依頼の連絡も何本かあったが、事件の詳細を知らないのは馬場も同じなのだから、そういうことには返事のしようがなかった。

その種の電話は全部、総務部広報課の担当者にまわした。

時計の針が十一時をまわるころになって、やっと電話のベルが遠のいた。

死んだ由利には気の毒な話だが、かりに由利が三国物産社内でのエリート・コースである機械第二部長の椅子にすわっていたのでなければ、その死も、

（これほど世間の関心をそそりはしなかったろうな）

馬場は、ようやくベルの音を途絶えさせた電話機を見つめながら、ぼんやりと考えた。要するに、三国物産という名門であり巨大な社名が、由利にとっては不幸でしかないその死を、一見華麗なものにしているのだ。

（由利部長も、もって瞑すべし、か……）

脈絡もなくそう思ったとき、また電話の呼出し音が馬場の神経をさかなでするように鋭く鳴りひびいた。

思わず眉をひそめるような表情になって、馬場はのろろと受話器をとりあげた。実際、馬場にしてみても初めて経験する異常事のさなかで、同じ科臼を何度もくりかえすのに疲れきっている。

（今度はどこの誰からなのだ）

だが、聞こえてきたのは問合せでもなければ、由利の急死をいたむ見舞いの言葉でもなかった。